

よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための  
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2018 年度

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

## 1. はじめに

鹿児島大学水産学部・FD 委員会では、学生に対する指導の充実、主体的な学習を促すための方法の検討、教育・研究の場が抱える今日的課題への対応などを課題として活動に取り組んできました。FD 講習会では、各所で指摘されるハラスメント問題について、臨床心理学研究科・中原睦美教授よりご講演頂きました。全学のワークショップでは、水産学部からの複数の教職員と学生が参加し、学生の主体的な学びを加速させる取り組みについて意見交換しました。この一年間のFD 委員会の活動を振り返り、以下のようにまとめました。

## 2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会では受講生に対し、各学期末に授業アンケート（表 2.1）を行っています。受講生の抱く満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、平成 29 年度後期および平成 30 年度前期の授業アンケートについてまとめます。なお、ムードルを用いた授業アンケートの実施は、

平成 28 年度後期～29 年度前期までの実施となり、平成 30 年度前期からはマナバに移行されました（アンケート内容は継続）。特に、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で答えたのち、満足できた点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、新しい視点からの意見集約が行われました。Moodle から Manaba への移行に伴い大きく変わったこととして、1) 授業アンケートへの回答率の向上した、また、2) 学生からの具体的記述が多く挙げられるようになったことが挙げられます。なぜこのような状況が生じたのかについて理由は調査していませんが、Manaba/Respon の使い勝手が学生にとって良いこと、教員からのアンケート

表2.1 Moodleを用いた水産学部授業アンケートの質問項目

1	この授業を選んだ動機は何ですか？（複数回答可） 授業内容に興味・関心を持ったから／専攻分野との関連性を考えて／履修しやすい曜日や時間帯だったから／必修科目だから／単位修得のため
1	この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。
3.	授業はシラバスどおりに進められましたか？（はい・いいえ）
4.	シラバスに示された学習目標を達成できましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
5.	授業は分かりやすかったですか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
6.	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
7.	第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
8.	他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？（はい・いいえ） ⇒はいを選択した学生は、重複・類似していた内容、および、重複・類似内容に対する感想・意見を以下に記入してください。
9.	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
10.	担当教員が次年度の授業改善に役立ちますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。

回答への呼びかけが徹底されていること、初年次セミナーでの取り組み内容の浸透、などが考えられます。その他、特筆すべきこととして、平成 30 年度の FD 委員会では、ベストティーチャー賞の選考に授業アンケート結果が利用されました。平成 29 年度後期のアンケートより、新たに、「他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？」を加えた。科目間でどのくらい内容に重複があるのか？（学生が）異なる科目で内容の重複を感じた場合、授業評価は良くなるのか悪くなるのか？を検討しました。重複した内容が見られることに対して、学生からのコメントは「〇〇

学との関連性などをふまえ、より深い理解を得ることができ、満足のいく授業であった」のなど、おむね肯定的で、その内容の重要性の確認や、関連する科目とのつながりを意識することに繋がっているようです。一方で、授業内容重複に対して否定的な意見も見られました。学生からの否定的コメントを俯瞰的に見ると、分野間というよりはむしろ、分野内の教員同士で学生からの情報共有が必要と考えられるものがありました。各科目の特徴を学生が明確に理解できる工夫や、科目間での授業内容の調整が必要になるかもしれません。

**表 2-2 各アンケート項目の集計結果について**

	H29 年度後期	H30 年度前期
Q1. 自宅学習時間(平均)は？	1.08	*

\*H30 年度前期の自宅学習時間については、マナバのシステム上、集計作業が困難であり実施しない。

各項目に対し、「はい」と答えた割合(%)

	H29 年度後期	H30 年度前期
Q2. シラバスどおりの授業だった？	95	96
Q3. 学習目標を達成できた？	93	95
Q4. 授業はわかりやすかった？	86	87
Q5. 質問しやすかった？	92	85
Q6. 授業構成や進め方は適切だった？	95	93
Q7. 全体的に満足？	90	94

以下に、平成 29 年度後期、平成 30 年度前期のアンケート結果総評を紹介します。

### 1) 平成 29 年度後期

回答のあった 37 科目について集計を行った。5 人以上の回答があった科目は、12 科目 (32%) と平成 28 年度 (40%) と若干低下しました。なお、1~4 人の回答があった科目は、25 科目 (68%) となりました。授業への満足度を示す質問に対して、「はい」と答えた学生の平均は、全ての質問で 86~95% の高い値が得られましたが、幾つかの科目においては、「授業のわかりやすさ」、「授業構成や進め方」、「全体的な満足度」の項目で、「はい」の割合が 60% を下回るものがあり、授業内容の再検討が必要と考えられます。また、この項目で得られた学生からの意見は、科目の統廃合を考えるうえで重要な資料になる可能性がありますのでご活用いただければ幸いです。すでに、Moodle は利用できなくなっているため、平成 29 年度後期にご担当された授業科目に対する学生からの感想や要望はダウンロードできません。データが必要な方は、FD 委員会もしくは学生係にお問い合わせください。

## 2) 平成 30 年度前期

5 人以上の解答のあった科目は、42 科目でした。授業満足度を示す Q1.6, Q1.8, Q1.10, Q1.12, Q1.16 の 5 項目について、全科目の平均をとると、 $91\pm 1\%$ と高い数値でとなりました。しかしながら、Q1.8 (授業のわかりやすさ) において、「はい」と答えた割合が、17%、42%、43%となった科目や、Q1.16 (全体的な満足度) での「はい」の割合が 55%となった科目も存在しますので、各科目の担当教員は原因を分析して対応する必要があるのではないのでしょうか。特に、Manaba に移行後は、学生が具体的コメントを多く書き込むようになっており、本アンケート結果は、今後の授業振興の参考になる意見を拾い上げるために、今まで以上に十分活用できると考えられます。

## 3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度と同様に、授業公開科目を募った後に授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。平成 30 年度は、下記に示す合計 19 科目で授業公開が行われました。

### 前期 (計 5 科目)

電子工学基礎、基礎水産資源学、水産動物行動学、養殖経済論、水産物流通論

### 後期 (計 14 科目)

鹿児島水産学、国際水産学、水質保全学、水産資源解析学、資源生物学実験、食品科学、微生物実験、分子生物学、水産商品需給論、フードビジネス論、水産経済学、水産総合演習 I、水産マーケティング論、水産科学英語 (水圏環境保全科学)

公開科目数は昨年度と同様であり、多岐にわたる分野の教員が実施しました。公開授業で授業参観が行われたのは 2 科目に留まりました。前年度から、授業参観の低迷が指摘されていましたが、本年度も引き続き同じ状況でした。なお、来年度はベストティーチャー賞を受賞した教員の授業参観を企画する予定です。授業参観をより質の高いものにしていきます。

また、授業内容をより良いものにするため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」の作成をしております。平成 30 年度は、下記に示す合計 37 科目で報告書の作成が行われました。その内容は水産学部のホームページに掲載されています。

### 前期 (合計 20 科目)

資源生産管理学、水産動物行動学、Fisheries Production Science、魚類学、漁具漁法学  
基礎生化学、海洋生態学、プランクトン学、水圏科学実験、水圏生物学実験 II、水産統計学演習  
生物海洋学、食品衛生学、資源生物学実験、電子工学基礎、水産資源生物学、沿岸地域経営論  
水産企業論、水産経済学実習 II

## 後期（合計 17 科目）

資源利用管理学、先進資源利用科学、代謝生化学、水産増養殖学、魚類生理学、水産資源解析学  
水圏生物学実験 I、実験計測機器基礎、電波測器学、赤潮アオコの科学、水産総合演習 I  
鹿児島水産学、資源生物学実験、生体防御学、増養殖学実験基礎、陸水学

### 4. 学生・教職員ワークショップ：学生の主体的な学びを加速させる

平成 30 年 12 月 7 日、「学生の主体的な学びを加速させる」をテーマに、学生・教職員ワークショップを開催しました。加藤氏（国際教養大学）、宮浦氏（九州工業大学）の講演後、学生と教職員の混合チームでディスカッションを行いました。水産学部からも複数の学生、教職員が参加し、学生の主体的な学びを加速するために必要な事柄などについて話し合いました。最後に、グループごとに成果の発表が行われました。

鹿児島大学には図書館のほか、複数の共用スペースがあります。それらの有効活用についても話し合いが行われました。図書館や共用スペースの開館時間を求める意見がある一方で、健康上の理由から、深夜に及ぶ利用は望ましくないといった意見もみられました。ワークショップでの検討結果を、共用スペース等の運用にいかに関活用するのか、検討が求められます。

### 5. FD 講習会：心理学・臨床心理学からみた大学で起きるハラスメント

平成 30 年度は FD 講習会を平成 30 年 12 月 27 日に教職員を対象とし、「心理学・臨床心理学から見た大学で起きるハラスメント」と題して中原睦美臨床心理学研究科長に講演をご担当いただきました。この講習会の目的は、ハラスメント問題が複雑になっていることに増して、あらたな学内での対応もあり、一方的な禁止事項の指導ではなく、「何故」、「どうして」を理解した上でハラスメントのない環境づくりを進めることです。

講演では、はじめにハラスメントに関する法律の概要や我々が置かれている教育機関としての特殊な環境について説明があり、教員と学生および学生間については、教育関連法令には特段の定めがなく、国立大学法人において啓発活動や相談窓口の設置などの措置をとる必要があることを除けば、民法等の一般法令の定めによるとの説明がありました。これに続き、大学におけるハラスメントについて、大学における実例、発生の理由・原因、ハラスメントにより学生が受ける不利益、加害者側の失うものについて具体例を用いて説明があり、表面化しにくい問題であるものの、一度起きてしまうととても大きな問題となることを認識させられました。また、起きてはならないハラスメントではありますが、起きてしまった場合にどのように対応すべきかについて説明があり、その対応に多くの努力量が必要となることから、いかにハラスメントのない環境を整えていくか、発生した場合にはいかに対応を迅速に進めるかが重要であることを認識させられました。

予防策には精神論的なものもありますが、特に教員は「学生からパワーがあるとみなされている

自覚」、「叱られ慣れてない若者の増加の理解」、指導時の研究室が密室とならない、可能な限り複数学生との指導体制をとるなどの「環境・構造の工夫」、「感情の制御」および「学生との適切な距離を保った関係確保」がキーポイントとなることもご教示いただきました。これらを参考にハラスメントのないキャンパス整備が引き続きすすめられることが必要であると思われます。

なお、この講習会には年末の仕事納めの日であるにもかかわらず、教員 31 名（出席率 75.6%）、事務職員 7 名および技術職員 2 名の合計 40 名の参加がありました。



## 6. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを合わせて質問するような設問としました。平成 25 年度から大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました。ここでは、平成 29 年度の卒業時・修了時アンケートについてまとめます(学部回答者数 126 名、修士回答者数 21 名)。

卒業時アンケートおよび修了時アンケートの設問項目を図 7.1 および図 7.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、項目 B では国際化に関する質問(平成 26 年度から追加)を、項目 C は就職・進学に関する質問、項目 D では分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。アンケートは、項目 A、B、C は全体で、項目 D は 分野ごとに集計しました。結果を図 7.3 および図 7.4 に示します。

教育目標に関する質問(項目 A)では、「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」

を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどでした。A7（就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ）を除けば、いずれの質問でも前年度結果と比べると「④全く思わない」と感じる学生がおらず、専門分野における学修に肯定的な考えを持てたようです。また、A4（水産技術者として必要な英語能力が向上した）およびA5（情報処理能力が身に付いた）では、学部生において「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」の割合が前年度よりも増加しました。

国際化に関する質問（項目 B）では、前年度同様に学部生・大学院生共に英語力の向上や異文化理解、国際交流に興味はあるものの（B13～B17）、実際には取り組んでいない傾向（B8～B11）が見られました。B13～B17 では、大学院生が「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」と感じる割合が学部生よりも高いのは、海外研修・サマーセッションなどの国際交流機会が多いためと考えられます。

就職・進学に関する質問（項目 C）では、学部生・大学院生共に「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」が70%を超えており、希望する職種に就くことができた学生が多くを占めたと考えられます。ただし、近年就職内定率が増加傾向にあるにもかかわらず、前年度と同様に未決定の学生がいるため、細やかな就職支援が必要かもしれません。

分野の人材育成目標に関する質問（項目 D）については、学部生・大学院生共に「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」と感じる学生がほとんどを占めましたので、各分野におけるカリキュラム目標を概ね達成できていると判断できます。

以上から、卒業時・修了時アンケートの結果、学部・大学院の教育目標は概ね達成できていると考えられます。

図 6.1 卒業時アンケートの様式

平成29年度 卒業時アンケート(学部生用) 学部生はこの面の質問に答えて下さい

1.(設問1) 学部生は①にマークし,下記 A に進む。大学院生は②にマークし,裏面 A に進む

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目(全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した
3. 基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 情報処理能力が身に付いた
6. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた
7. 現場対応能力が備わった

B. グ  
ロー

バル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修(Advanced Lecture on Tropical Fisheries など)に参加しましたか?
9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
13. これから、英語の力(語学力)を伸ばしていこうと思いますか?
14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、下に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問19～25のうち1つ選択)

①十分にそう思う(当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目(1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれととりまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
25. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた

ご協力、ありがとうございました。



## 図 6.2 修了時アンケートの様式

平成29年度 修了時アンケート(大学院生用) 院生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし、裏面 A に進む。大学院生は②にマークし、下記 A に進む

A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目(全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した
3. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した
4. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた
5. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた
6. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた
7. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修(Advanced Lecture on Tropical Fisheries など)に参加しましたか?
9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
13. これから、英語の力(語学力)を伸ばしていこうと思いますか?
14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答)(設問18に数値をマークしてください)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください(設問19～24のうち1つ選択)

①十分にそう思う(当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目(1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた

ご協力、ありがとうございました。

図 6.3 平成 29 年度卒業生に関する集計結果

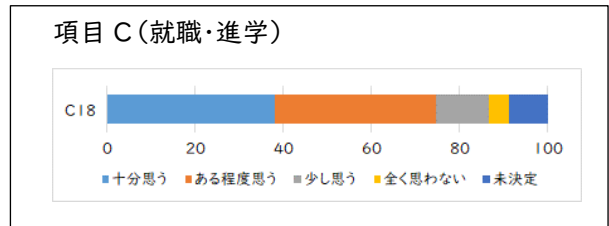
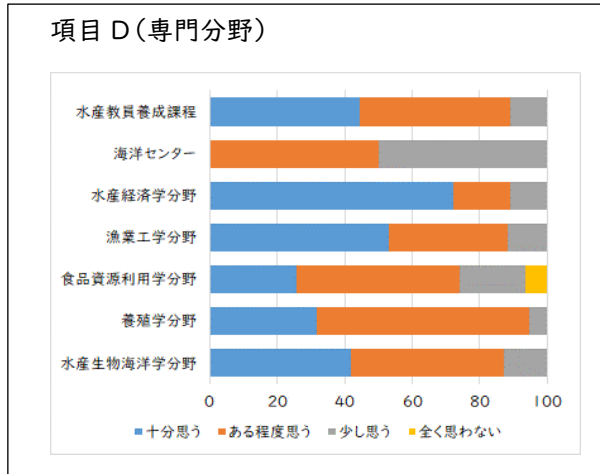
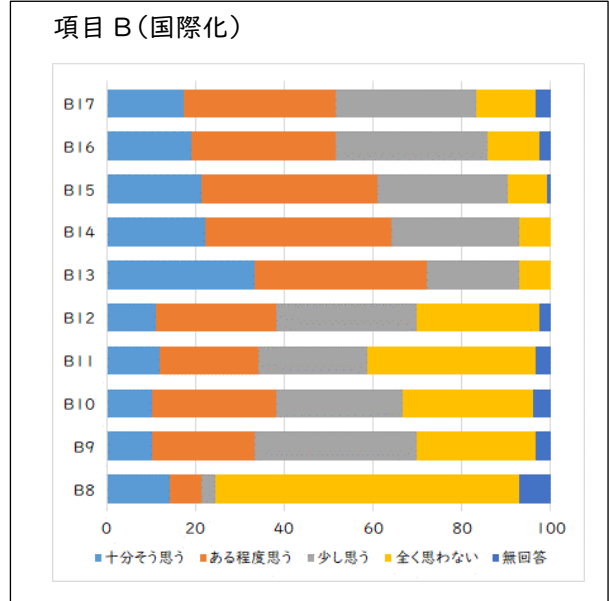
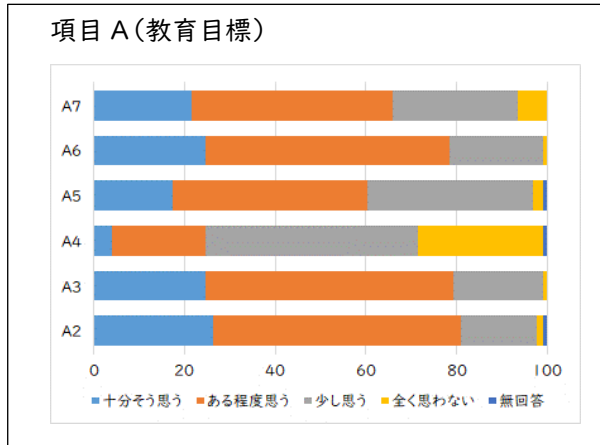
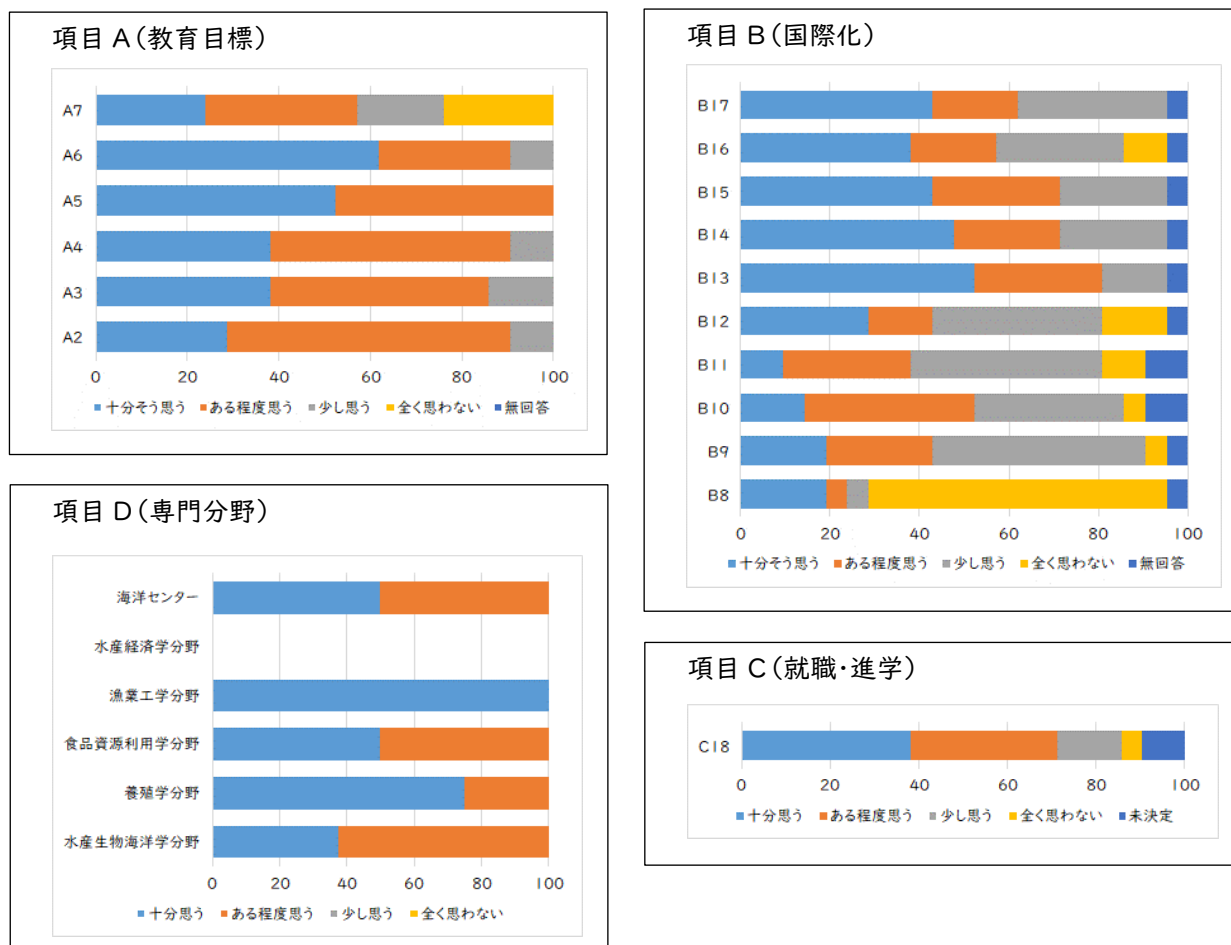


図 6.4 平成 29 年度修了生に関する集計結果



## 7. ベストティーチャー賞の選定

平成 30 年度より、優れた講義を行った教員を表彰する「ベストティーチャー賞」制度がはじまりました。

水産学部では、平成 29 年度後期、平成 30 年度前期に実施した授業アンケートを分析した結果、小松教授の「公衆衛生学」への評価が高かったため、小松教授をベストティーチャー賞に選定しました。「シラバス学習目標を達成できたか」、「授業は分かりやすかったか」、「発言・質問しやすい配慮はあったか」、「授業の構成やすすすめ方は適切か」、「授業内容は満足か」、いずれも高評価であった。また、講義中に配布した資料やパワーポイントが分かりやすかった、講義後に質問できる時間が設けられていた、講義内容が将来役立ちそうだった、等の意見も上げられていました。その他の講義のアンケート結果と比べても、その評価は際立っていました。



編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：鳥居享司

副委員長：吉川 毅

委員：石崎宗周、小針 統、竹内 裕、有田洋一、郡山 茂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20 099-286-4111（代表）